降臨節前主日（特定29）　ヨハネ18章31―37節

［直訳］

31 そこで言った　彼らに　ピラトは、
「取りなさい　彼を　あなたがたが
そして　あなたがたの律法に従って　あなたがたが裁きなさい　彼を」。
言った　彼に　ユダヤ人たちは、
「私たちに　許されていない　殺すことは　誰をも」。

32 ようにと　イエスの言葉が　満たされる
ところの　彼が言った　知らせつつ
どのような　死によって　彼が死ぬことになっているか。

33 そこで入った　再び　官邸の中へ　ピラトは
そして　呼んだ　イエスを
そして　言った　彼に、
「あなたは　ユダヤ人たちの王であるか」。

34 答えた　イエスは、
「あなた自身から　あなたが　このことを　言う
あるいは　他の人々が　言った　あなたに　私について」。

35 答えた　ピラトは、
「まさか　私が　ユダヤ人で　あるだろうか
あなたの民族と祭司長たちが　引き渡した　あなたを　私に。
何を　あなたは行ったのか」

36 答えた　イエスは、
「私の支配は　あるのではない　この世から。
もし　この世から　ある　私の支配が、
私の従者が　戦っていただろう［に］
ようにと　私が渡されない　ユダヤ人たちに。
だが実際　私の支配は　あるのではない　ここから」。

37 言った　そこで　彼に　ピラトは、
「それでは　王であるか　あなたは」。
答えた　イエスは、
「あなたが　言う　次のことを　私は王である。
私は　このことのために　生まれた
そして　このことのために　私は来た　世の中へ、
ようにと　私が証しする　真理について。
真理から ある者はすべて　聞く　私の声に」。

［新共同訳］

31 ピラトが、「あなたたちが引き取って、自分たちの律法に従って裁け」と言うと、ユダヤ人たちは、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」と言った。32 それは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、イエスの言われた言葉が実現するためであった。33そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。34イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」35ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。」36イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」37そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」

①構成

ⓐ 31―32節

㋐ピラトは「あなたがたがイエスを取りなさい」と命じる。主語の「あなたがた」には「あなたがたが自分で」の意味合いがある。しかし、ユダヤ人たちは「人を死刑にすることが許されていない」と答える。ユダヤの最高法院は裁判権と警察権を保持したが、政治的決定には権限がなかった。死刑もローマ総督の同意なしには執行することはできなかった。

㋑イエスはユダヤ教の石打ちの刑ではなく、ローマの十字架刑によって死ぬ。それはすでに12章32節に語られている。「地上から上げられる」は、十字架に上げられることと天に上げられることを意味している。

ⓑ 33―35節

㋐33節に「あなたはユダヤ人たちの王であるか」とあるが、これとほぼ同じ表現が37節（「それではあなたは王であるか」）にもある。この繰り返しから見て、主題は「イエスは王なのか、王であれば、どのような王なのか」にあるだろう。

㋑35節でピラトは「まさか、私がユダヤ人であるだろうか」と答えている。これは否定の答えを予期する疑問文。この言葉にピラトの気持ちが明白に示されている。彼は総督としてユダヤ人の政治的な動向には細心の注意を払うが、信仰上のもめ事には興味がない。

ⓒ 36節

㋐この節には「私の支配」が三度繰り返されるが、ここで「支配（バシレイアー）」と訳された言葉は、「王（バシレウス）」と同根の言葉である。イエスが王として行う支配は、「この世から」ではない。この節の最後にもほぼ同じ表現を繰り返している。イエスの支配の源泉は「この世」にはない。

ⓓ 37節

㋐再度「あなたは王であるか」とピラトに問われたイエスは、「このことのために」を二度繰り返して、この世に来た目的を語る。イエスは「真理について証しするようにと」生まれ、この世に来た。最後の行の「真理からある」は、36節の「この世からある」と対応しているだろう。ここでの「真理」はこの世とは違ったもの、つまり神を指している。

②イエスの言葉が実現するため（31―32節）

ⓐ過越祭で町中がにぎわう中で、大祭司たちの陰謀も頂点を極めようとしている。逮捕されたイエスは、最終判決を受けるためにピラトの前に引き立てられる。

ⓑローマの支配者はユダヤ人たちの内部の問題、特に宗教問題に関しては刺激を与えるのを恐れて、腫物に触るかのように扱い、なるべく関わりを持たないようにしていた。イエスを殺害したい大祭司たちが、死刑執行の権限を持つピラトにイエスを引き渡すと、ピラトはそれを嫌い、ユダヤ人の間でイエスの裁判を決着させようとする（31節）。だが、ユダヤ人たちがそれを拒んだので、ピラトはイエスが謀反を起こした人間かどうか、尋問するために、官邸の中へ戻り、イエスと向かい合う。

③イエスは王か（33節―35節）

ⓐピラトは「あなたはユダヤ人たちの王であるか」とイエスに尋ねる。「ユダヤ人たちの王」という称号の起源は明確ではなく、その意味合いも不明である。しかし、ユダヤ人を異国の支配から解放するという期待がこめられた称号であったかもしれない。しかし、ピラトの前に現われた「ユダヤ人たちの王」は、弱々しく、無力な姿をさらしている。ピラトはこの姿に戸惑い、いぶかしく思ったにちがいない。

ⓑイエスはピラトの問いに真正面からは答えず、「あなた自身からあなたがこのことを言うのか、あるいは他の人々が私についてあなたに言ったのか」と反問する。せっかく自己弁護の機会を与えたのに、反問してきたイエスにピラトはむっとしたように「まさか私がユダヤ人であるだろうか」と答える。ユダヤ人でないピラトにとって、ローマ支配を脅かす問題でなければ、ユダヤ人のもめ事に興味はない。ピラトは「何をあなたは行ったのか」とあらためて問いただす。

④イエスの支配（36節）

ⓐ36節で「支配」と訳した語（バシレイアー）は、王による支配が及ぶ範囲を表して「国」の意味にも、王の支配そのものを表して「王的支配」の意味にもなる。36節のイエスの答えは「私の支配はこの世からあるのではない」で始まり、「だが実際、私の支配はここからあるのではない」で終わっている。

ⓑその間には、非現実の条件文が置かれている。もしイエスの支配が「この世からである」なら、イエスの従者が彼を渡さないようにと戦っていただろう、とイエスは言う。このような文章構成で強調されていることは、イエスの王的支配は「この世から」生じるのではないということである。イエスは間接的に「王」であることを認めたが、だが地上の王ではない。イエスの出自は別のところにある。

⑤イエスの使命（37節）

ⓐしかし、イエスの真の出自を見抜けずに、イエスの真意を把握しきれないピラトは、自分の視点に対話を戻し、「それでは（やはり）あなたは王であるか」と尋ねる。イエスはそれに「あなたが、私は王であると、言っている」と答える。この答えはピラトの問いを肯定も否定もしてはいない。イエスがこのような曖昧な答えをしたのは、イエスは確かに王であるが、ピラトが思いも及ばぬ王だからである。

ⓑ「王（バシレウス）」

㋐「メシア的な王」

この語はごく普通に、世俗世界の支配者を表すが、転義して、至高の力を持つ者を表す。旧約聖書では、「王」は、単なる世俗の支配者ではなく、終末の時に正義と平和をイスラエルにもたらし、神の支配を実現するメシア的な王にしばしば使われた（イザ9・11章など）。イエスは「ユダヤ人の王」として誕生する（マタ二2）。王としてエルサレムに入城し（マタ二一5と並行箇所）、終わりの日には王として最後の審判を行う（マタ二五34）。ナタナエルは「イスラエルの王」であるイエスへの信仰を表明する（ヨハ一49）。しかしその一方で、王であるイエスは、政治的な権力者や（マタ二3）、民衆の空腹を満たしてくれるメシアと誤解される（ヨハ六15）。「ユダヤ人の王」として告発され（ルカ二三2・3）、裁判にかけられ（33節、マコ一五2）、「ユダヤ人の王」と書かれた罪状書きが付いた十字架にはりつけられる（マコ一五26）。どのような意味でイエスが王と呼ばれるのかはどの箇所でも問題となっており、ヨハネ18章では、ピラトの問いをきっかけとして（33・37節）、イエスがこの世の王ではなく、真理について証しするために来た王だと述べられている（37節）。

㋑神は「偉大な王」（マタ五35）、「諸国民の王」（黙一五3）、「永遠の王」（1テモ一17）、「王たちの王」と呼ばれる（1テモ六15）。マタイ福音書の「天の国」に関するたとえでは、神が王として描かれている（マタ一八23、二二2・7・11・13）。

ⓒ37節の五・六行目に「このことのために」が繰り返されるが、ここでの「このこと」とは次の行の「私が真理について証しするようにと」を指している。イエスが生まれ、この世に来た目的は、真理を証しすることにある。ここでの真理は、「この世からではない」ものが証しする真理であるから、神を表している。イエスの支配は神からの支配であり、神を私たちに示すことがその使命である。

⑥真理に目を向けることのできない者

ⓐユダヤ人をまじえず、イエスとピラトが相対している。一方は見栄えがしない、しかし神に根源をおく王であり、他方はきらびやかな衣装をまとうが、この世の権力に立つ総督である。ピラトの前には真理を証しする王が立っている。ピラトはイエスを裁くが、真に裁かれているのは、イエスの前に立つピラトである。

ⓑピラトにとって重要な事柄はローマに関わる政治的問題である。そのピラトにとっての「王」は政治的な王である。そこから視線を外すことのできないピラトは、イエスは「この世からではない支配」を行う王であることを聞き入れることができない。自分の視点に留まり続ける頑なさは、目の前にいるイエスと神に出会う機会を奪っていく。